

# Newsletter

February 2022

<http://www.aack.info>

## 目次

サンティアゴ巡礼ーフランス・ルート 安仁屋政武 .....1	事務局だより .....15
上高地の三季 山田和人 .....11	会員動向 .....16
雲南懇話会、京都開催までの歩み ーコロナ禍に翻弄された日々ー 雲南懇話会幹事団 .....13	編集後記 .....16

## サンティアゴ巡礼ーフランス・ルート

安仁屋政武

最近、この巡礼のことは日本のメディアでもたまに見かけるようになったが、まだ広くは知られていないと思う。スペインの北西部に位置する都市、Santiago de Compostela (以下SdeC) に続く巡礼路で、幾つかある。しかし、一般に知られているのはフランスからピレネー山脈を越えスペインの北部を横断して行く通称

フランス・ルート (Camino Francés) と呼ばれる約 800km の巡礼路で、1993 年にユネスコの世界遺産に登録された (図 1)。

その由来は次のようなものである。キリストの弟子の一人 Santiago (英語 St. James、ドイツ語 Skt. Jakob、フランス語 St. Jacques) はキリストの死後現在のスペイン地方で布教し



図 1 サンティアゴ巡礼、フランス・ルート図 (二宮書店基本地図帳 2004-2005 に加筆)。サン・ジャン・ピエ・ドゥ・ポーからサンティアゴ・デ・コンポステーラへのルートと主な都市・町。

た。9世紀にその痕跡が現在の SdeC で見つかり、巡礼が始まった。そして11世紀頃この地が巡礼路の一大中心地となった。巡礼のシンボルであるホタテ貝の由来にはいろいろな説がある。その一つは、貝の蝶番に集中する凹みの模様がいろいろなルートが一点 (SdeC) に集まっているのに似ているというもので、現在では典型的な道標 (後出写真 13B 参照) となっている。

私が巡礼の事を知り興味を持ったのは2000年代である。それで2015年秋に四国の八十八の寺を巡る1200kmのお遍路を一筆で歩き、2017年11月は高野山から熊野本宮までの小辺路・熊野古道とそこから那智の滝までの中辺路雲取越を歩いた。この経験からサンティアゴ巡礼に本格的に興味を持った。世界中から年間25～30万人ぐらい来るといふ巡礼路はやはり歩かなければ分からない何かがある筈だ。

ということで、2019年の6月に行くことに決め、アマゾンでガイドブック Camino de Santiago - Camino Francés (著者 John Brierley。巡礼では English Native の90%以上がこの本を持っていた) を買い計画を立てた。歩くのを33日とし予備と帰りのマドリードの観光も含めて9月3日から10月14日の41日間の計画で航空券を購入した。荷物は宿泊用にシュラフはやめてインナーにしたので9.1kgとなった。道中、これに水、食料が加わるので10kg弱となった。

9月3日：夜遅くパリのドゴール空港に着き、タクシーで電車の始発駅モンパルナスの近くのホテルに行く。4日：巡礼の起点となる Saint-Jean-Pied-de-Port (図1参照) へ Bayonne 経由で行く。パリ発の TVG の最高速度は312km/hだった。巡礼事務所で巡礼手帳 (credential) を貰う。これにスタンプを押してもらい、巡礼の証拠とする。これがないと安い巡礼宿に泊まれない。この日の宿は日本を発つ前に予約しておいた。割り当てられたのは12人部屋で女8人、男4人であった。

巡礼宿 (Albergue) について簡単に説明する。大きくは公営と民営がある。前者は大体€5から€10程度である (当時€1≈121～3円)。民営は少し高い。教会や修道院が運営していて無料という所もある (寄付という形で公営と同じぐらい払う人が多い)。シーツと枕カバーを渡



写真1 巡礼者用定食“メニュー”の例 (9月21日 Moratinos)。ワイン付きのフルコースで€10。ワインのラベルは Camino Francés。

してくれる。部屋は男も女も同じ、トイレは大規模な所を除いて男女同じの所が多かった。シャワーは別の所が多かった。ベッドは2段の所が殆ど。

食事 (夕食) は宿あるいは町のレストランで Menu と呼ばれる格安の巡礼定食がある (写真1)。これは€10～12でエントリー、メイン、デザートにワインが付く。ワインはレストランによってグラス、ピッチャー、ボトル (750ml) といろいろなサイズである。ビールが選べる所もあった。夕食以外は大体マーケットで買って自前で食べた。特に朝は宿で食べると出発が遅くなるので、ほとんど申し込まなかった。最初の2日で懲りた。朝はヨーグルト、バナナ、昼はパン、サラミなどの自前のサンドイッチと果物である。歩いている途中でカフェに入ったのは2～3回である。

5日 (雨、曇、風、寒い)：歩きの初日で標高差1200m以上の登り (累積1450m)、600m下る通称ナポレオン・ルートである。巡礼路の最大の難所だが、宿の朝食が遅く出発8時前とかなり出遅れた。上は放牧地なので途中まで車道がある。天気が悪くて寒く、1100mより上では霧雨と風で手がかじかんだ (写真2)。登りはどんどん先行者を抜いて行く。1416mの峠からの下りではほとんど人に会わなかったのので、かなり追い抜いたと思った。が、宿泊地



写真2 初日のピレネー越え。Cruceiro (十字架、標高1230m)。ここから山道になる。天気が悪く手ががじかむほど寒かった。

Roncesvalles の宿である修道院に入ったら大勢の人が整理券を持って受付の順番待ちをしていた。予約なしで1時間ぐらい待たされた。夕食も20:30からの遅番。出遅れたのが響いた。割り当てられた部屋は100人ぐらい入る大部屋。ベッド数が限られているので遅く着いた人の中にはあぶれる者もいて次の村まで行く。後から聞いた話ではポーランドの女の子3人組はベッドが無いと言われて泣き崩れたそうだ。それで車で次の村まで送ってもらったとのこと。

7日(快晴):立ち寄った城壁都市 Pamplona (図1参照)は合併記念の祭りで、高さ3~4mの動物や人間の形が歩いていた(写真3)。独自の言語と文化を持ち独立運動が盛んなバスク地方の中心都市で、日本では牛追い祭り知られている(写真4)。ここは Navarra 州の州都なので Univ. of Navarra がある。1990年にここからの女子留学生を受け入れたことがある。こぢんまりとした綺麗なキャンパスだ。この日泊まったのは Pamplona の少し先 Cizur Menor で、宿の私が入った8人部屋は7人が(比較的)若い女性、その内5人が韓国人だった。後は台湾人1、日本人1人。東洋人を一部屋にまとめたようだ。隣のベッドの韓国人のおばさんは食料やら衣類が詰まったスーツケースで来ていた。配送サービスを使っているのだ。€5~7程度で安い。多分通して歩かないのだろう。道中、たまにほぼ空身で歩いている人を見かけたが(ほとんど女性)、このサービスを利用しているのだ。事前に宿を予約しておく必要がある。気ままには歩けない。

巡礼中、大勢の韓国人の巡礼者を見た。アメ



写真3 バンプローナの合併記念祭り。1423年に3地域が合併してバンプローナになったことを祝う。



写真4 バンプローナ名物の牛追い祭りの像。

リカ人に次いで多かったのではないだろうか。道中見かけたいわゆる東洋人の99%以上が韓国人だった。中国人は数人だけ、日本人は10人ぐらいだったであろうか。韓国人に聞いたら、数年前TVで有名俳優がこの巡礼をやって大人気となったそうだ。しかも韓国にはクリスチャンが多い。巡礼者は全体的に女性が多く(感覚的に70%ぐらい)、しかも若い女性の1人歩きが結構いた。宗教道で人数が多いから安全なのだろう。盗難やその他の事故の話は一切聞かなかった。

8日(曇後晴):約500m登って Alto del Perdón (許しの丘)という風車が林立している尾根を横切った。この尾根は驚いたことに長径10~20cmぐらいの円礫からなっている。昔河原だったところが周りの侵食で残ったのだろう。宿泊地 Puente la Reina (女王の橋)のバーで面白い看板を見た。生ビールのサイズに関する



写真5 プエンテ・ラ・レイーナのバーで見た生ビールのサイズの固有名。



写真7 イラーチェのワインの泉。赤ワインが出てくる。



写真6 城郭都市シラウーキ。左下はブドウ畑。

るもので、大中小ではなくそれぞれのサイズに固有名詞がついている。幸い絵がついているので巡礼者も分かる(写真5)。町の教会(Iglesia del Crucifijo)にはとても珍しいY字型に磔になったキリスト像がある。地名の由来となったArga川に懸かる橋は11世紀に造られたもので現役である。

9日(ほぼ快晴):ブドウ畑が出てくる。途中Cirauquiという小高い丘の上にある小さな城郭都市を通る(写真6)。土地が限られているから道路はかろうじて車が1台通れるぐらいの狭さでしかも急坂ばかり。足腰が弱くなったら歩くのはままならない。宿泊地Estellaの宿は教会が運営していて無料だが€10寄付する。因みに、この村の地名や通りの名前はスペイン語とバスク語の併記である。

10日(雨、降ったり止んだり):ワインの泉で有名なFuente de Iracheを通る。石の壁に付いている栓を捻ると水ならぬ赤ワインが出てくる(写真7)。当然皆立ち寄る。勿論ただ。近くのワイン農場が運営している。殆どの人はカップで受けて飲むが、中にはペットボトルや水筒を用意してきている強者もある。途中のVillamayor de Monjardínには標高910mの円錐の山の頂上に立派な城がある。15世紀のスペイン統一前の王国が割拠していた時代の戦いのすさまじさを想起させる。昨日痛くなった左足のふくらはぎに痛みを感じた。足首も曲げると痛い。今日は歩き始めて6日目、今まで膝や足首の痛み、靴擦れなどでピッコを引いている人を結構見かけたが、自分もその1人となるのだろうか、という不安がよぎる。

11日(晴れ時々曇り):スペインワインに詳しい人なら知っているLa Riojaに入る。地面は一面河原のような円礫に覆われているのでブドウ以外の栽培は不可能である(写真8)。宿泊地Logroño(図1参照)のマーケットには日本食コーナーがあり寿司(海苔巻き、にぎり)とか豆腐を売っていた。こんな田舎にも日本食が浸透しているのかと驚いた。道中所々、小さな村の公園や街道沿いに巡礼者用の水泉があり、飲めると書いてある。昔の巡礼者にとってはとても貴重な水の補給場所だったに違いない。今はペットボトルを持ち歩いている人が多い。私



写真8 ブドウ畑と地面（ログローニョへの途中）。全て円礫で大きいものは長径20cm前後。まるで河原。このような地面が標高800m前後で延々と続く。

は宿の水道水を持ち歩いた。ヨーロッパを経験した人は知っているように硬水なので生水は飲むなどと言われる。が、私はペットボトルを一回も買わなかった。

出発日が同じで数日歩くと、同じ宿に泊まったり同じ部屋だったり、あるいは道で抜きつ抜かれつで何回も挨拶したりして顔を覚える。中には自己紹介して一緒に歩きながら話す人も出てくる。巡礼路を歩く人の目的はガイドブックや巡礼宿で聞いたのによると、大きく4つあるとのことだった。一つは勿論、敬虔なクリスチャンが救いを求めて、2つ目はクリスチャンではないが、歩くことに意義を見出そうとする、3つ目は人との出会いを求めて、そして4つ目は人生での辛い経験を癒すため。その他（キリスト教関係の）歴史的建造物・遺跡等の見学など。多くの人は理由が2つか3つあるのではないだろうか。私は歩く派なので、地形や地質など自然を、町では町並みや家屋などを観察しながら淡々と歩いた。勿論、教会等の歴史的・文化的なものは見学した。

道中いろいろな人と言葉を交わしたが、アフリカ、南米、オーストラリアなどは少なかった。インド、東南アジアはゼロ。イスラム教国からは初日にイランから来たという若い女性（もちろんクリスチャン）1人のみ。黒人は2人だけ。初老のスイス人の夫と歩いていたカメルーン人の女性と、30代とおぼしきアメリカ人の女性。

16日（曇、霧、後晴）：濃い霧の中を巡礼路最大の都市 Burgos（図1参照）を目がけて歩く。途中、原人の考古学サイトがあったが、霧で何も見えず。Burgosにはスペインで2番目

に大きい聖堂があり、観光客で賑わっている。宿の電話予約に便利だからということで、スマホ用のスペインのsimを買いに行った。計60分、28日間有効のが€20である。ところがsim lockがかかっていて使えない。事前に確認しなかったのが悔やまれ、豪華な食事一食分を無駄にしたという腹立たしさだけが残った。

17日（曇後晴）：今日は Meseta と呼ばれる台地地域に入った。標高800m前後の殆ど平らな地面が続く単調な地形と景色である。宿泊地 Hornillos del Camino で宿の受付が開くのを待っている間、札幌から仕事を辞めて世界を旅しているという若夫婦と知り合いになった。その後、京大の化学教室の助教を辞めて来たという男が同じ宿に来た。彼らとは最後までつかず離れずで、SdeC に着いた晩は一緒に食事した。夕食前に巡礼者のためのミサがあるので教会へ行った。祈りの後、言語別にグループに分けられ、それぞれの言葉（英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、日本語、スペイン語）で渡された紙に書いてある祈りの言葉を読むように言われた。日本人は私一人。

18日（晴時々曇）：Mesetaの最高点（861m）を過ぎる。濃霧の中林立する風車の点滅する明かりが幻想的である。まもなく15世紀に建てられた Convento de San Antón の廃墟を通る。大きな建物が残っており、当時の隆盛を物語る。やがて目の前に Castrojeriz の城が圧倒的な姿で現れた（図1参照、写真9）。宿で一休みした後、山の頂にある城に行く。かんかん照りで暑い。誰もいない。城からの見晴らしは360度圧巻である（写真10）。どこから敵が攻めてきても村のはるか向こうで見つけられる。

20日（曇時々晴）：Carrion de los Condes（図1参照）で泊まった宿は修道女達が運営するもので、夕方宿泊者達の集まりがあった。各自自己紹介してなぜ歩いているかを話した。私は四国のお遍路を歩いたので比べてみたいと話した。参加者の何人かは四国のお遍路（Temple Walk）のを知っていた。

23日（曇時々晴）：今日歩いたルート（Calzadilla de los Hermanos - Mancilla de las Mulas）は



写真9 カストロヘーリスの村と丘の上の城。植林が進んでいる。



写真10 カストロヘーリスの城から南を見渡す。360度の視界。右下に村。

メインの道と平行しているローマ時代の道で、一際人が少なく会ったのは5人だけである。一向に変わらない Meseta の景色を見ながら、次の宿泊地を目指して淡々とひたすら歩く。途中にはカフェもなにも施設がない。木立が所々にぽつんとあるだけである。このような所を歩く女性はトイレが大変だろうと思わず思う。というのは、道中、公共のトイレを見かけたのは1~2ヶ所に過ぎなかったからである。たまにあるピクニック・テーブルがあるような公園に行ってもない。代々木公園ぐらいの規模でもなかった（見つからなかった?）。であるから、ぽつんとある少し高い木の周りはティッシュペーパーだらけである。カフェに女性客が多いのはトイレを使うためでもある。男でも混み合っている街道沿いではしづらい。

また、道沿いに自販機が全くと言っていい程無い。全行程の道端で見かけたのは1つだけだった。水以外の飲み物が欲しければカフェに立ち寄るしかないが、いちいち立ち寄るのも面倒臭いので、日本のように自販機があればと思ったことは何回もある。文化の違いを強烈に感じたことの一つである。

24日（曇）：巡礼路で2番目に大きな都市 León（図1参照）に到着。ローマ時代の城壁が残っている。新しい靴を買うのと観光と休養（21日目）を兼ねて2日泊まる予定で来た。日本から履いてきた靴がすり減ったので砂利道では足裏が痛い（470km歩いた）。合う靴を捜すのに町中6km歩いた。巡礼宿は民営で小綺麗である。若い韓国人の女性が多く泊まった。私が入ったのは4人部屋。韓国人の中年のおばさんがいて、私が日本からだということと露骨に嫌悪感を表した（徴用工問題で日韓関係が最悪の時期だった）。フロリダ州から来たという70才の女性は、なんの事前の準備・計画もせずただ来たという。それで同室の韓国人に連れて行ってくれるよう同行を頼んだという。この大聖堂はステンド・グラスで有名で、息を呑むような美しさである。

29日（快晴）：昨日ようやく Meseta を抜けだし緑の多い山（丘）を越えて行くようになり、歩いていて楽しくなった。今朝早朝、巡礼路沿いの最高点、標高1504mにある Puerto Irago の Cruz de Ferro（鉄の十字架）に着く。大勢の人達が日の出を待っている。道は巡礼路沿



写真 11 モリナセーカの生木に彫った仏像。

いの最高点 1515m の Alto Altar のピークを捲いている。ここから次の宿泊予定地まで標高差 1000m 以上の山道の下りである。最初は快調に下り、山道に慣れていない人達をどんどん追い抜いていったが、800m ぐらい下ったら背中が張ってきた。脊柱管狭窄症を 3 年前に患ってから長い下りでこのような症状が出るようになった。Ponferrada (図 1 参照) 手前の宿泊地 Molinaseca の宿に、ここのオーナーが四国お遍路と交流するために日本へ行った時の四国新聞記事の切り抜きが張ってあった。また、すぐ近くにある町役場の庭には幹に日本人が仏像を彫った生木がある (写真 11)。その他、街中に四国お遍路との交流を示すモニュメントが幾つかあった。

10 月 1 日 (曇、霧雨、時々晴) : まだ暗い中、ヘッドランプを頼りに山道を急登のあと尾根道に行く。誰も歩いていない。道は山の中を通っていく。日本の中山間地のように気持ちが良い。24km 歩いて当初の宿泊予定地 La Faba に着いたが、早かったので更に 5km 先に行った。ガリシア (Galicia) 地方に入り、今宵の宿 O Cebreiro には 3 時に着いた。公営宿は順番待ちの長い行列があり、受付まで 1 時間以上かかった。大きな宿でベッドが 104 もあるが、珍しくスペイン語しか話さない女性 1 人が宿泊

者とおしゃべりをしながらのんびりと受け付けていたのだ。設備は良くなく印象が悪かった。ベッドの配置が変わり、2 段ベッドが 2 つくつつけられて 4 ベッドが一塊になっているので窮屈に感じる。この村には今でも使われている巡礼路では一番古い 9 世紀の教会がある。家は円形で萱葺き屋根である。ガリシアはスペインの中でも特徴的な地域の一つで、独自の言葉と独特の文化を持っている。また、大西洋からの気流のせいで湿気が多く天気が悪いのでも有名である。実際、濃い霧であったり、小雨が降ったりした。宿で洗濯しても今までと違って次の朝まで乾かなかった。

2 日 (曇、霧、雨、時々晴) : 今日の下りも 900m 位だ。7 時前に濃霧の中を出発。車道の巡礼路を避けて、少し登って森の中を通るトレイル・コースを取る。寒い。出て直ぐに雨が降り出し雨具を着ける。真っ暗闇でヘッドランプを頼りに歩く。誰もいない。全体として下りだが、結構登り下りが激しい (このお陰で背中は無事だった)。霧が凝結してしたたり落ちる。かなり寒い。典型的なガリシア天気だ。風がないのが救われる。牛が多く、空気は牛の糞の臭いが漂っている。Triacastela には昼前に着いた。半日休養を取ることにして行った宿は比較的新しく、一部屋 14 人のこじんまりしたものだった。後から若い女の子 3 人とおばさんが来た。合計 5 人。夜は奮発してガリシアの特別スープとエコで育てられた牛のステーキを食べた (€16)。が、期待した程美味しくはなかった。宿に帰ってから、終わりが見えてきたので明日以降の予定を立てて SdeC の宿を予約した。巡礼宿ではなく、ペンションと名乗っている宿である。

3 日 (晴後曇) : Sarría (図 1 参照) へ行く山道は霧だったが気持ちが良かった。見ると Sarría は雲海の下だ。ここはこれまでの巡礼路沿いの町とは異なる雰囲気を持っている。まず、現代的な建物が多い。そして服装や持ち物がここまで歩いて来た人達とかなり違う小綺麗な巡礼者が増える。夫婦で小さな子供を連れた家族などが目に付く。というのは、SdeC で巡礼の証明書を貰うには最低最後の 100km 歩かなければならない。そしてこの町がその 100km を



写真 12 メリーデ名物のタコ料理。

歩く人達の起点になるからである。巡礼路もここからは格段に良くなるので、この町の後、まだ歩けない乳幼児を乗せた乳母車を押しながら行く夫婦や、祖母連れを結構見かけた。ということで町の混雑と雰囲気を避けるため、Sarríaの2つ先にある町 Serra から更に2km先の森の中にある巡礼宿へ行った。昔の水車小屋を改装して、絵を描く趣味の女性が1人で運営している。一部屋10ベッドしかなく宿泊者はイギリス人の女性、デンマーク人の女性、不明の

女性そして後から来たドイツの学生6人(男3人、女3人)、私の10人だ。トイレ・シャワーとも男女共通。

5日(曇後晴)：宿泊地 Melide はタコ料理が名物で、店の前でタコを茹でて料理するのを見せている店もある(写真12)。ということで、少し奮発してタコ料理を食べた(しめて€22.40)。それなりに美味しかった。ここから終点の SdeC までは58kmなので2日で楽に行



写真 13 道標あれこれ。A. St-Jean-Pied-de-Port を出るところにある(9月5日)。巡礼宿の宣伝を兼ねたもの。Roncesvalles まで26km、Santiago まで791kmとある。B. Galicia 地方の新しい道標。下はユネスコの世界遺産登録を示している。ホタテ貝と矢印による典型的なもの。サンティアゴまで139.350kmとある(10月2日、O Cebreiro の近く)。C. 道路に石で描かれた道標。矢印の先は Buen Camino (よい旅) とある(15日、Agés への途中)。D. ビレネーの峠付近の道標。フェンスの左側フランス、右側スペイン(5日)。E. ひまわり畑で見つけた道標(14日、Belorado への途中)。F. 個人の家の門柱にある道標(9日、Lorca)。



けるが、身体を休ませる意味もあり敢えて3日かけてゆっくり行くことにした。泊まる所も少し贅沢して、巡礼宿ではなく個室のホテルにして予約した。夕食後、帰路のマドリードのホテルも予約した。

6日(曇後晴)：Melideを出て間もなく道が分かれた。薄暗い林の中、道標が見つからず道の良い方を行った。しばらく歩いても道標が出てこなかったの、丁度いた村人に確認したら間違いだと言う。戻る時、向こうから間違っただ道を来る集団がいたのでその旨を告げる。やはり分かりにくいのだ。道の分かれに戻って道標を捜したら暗いところでは見つけるのが困難な分りにくい所にあった。40分のロス。巡礼路の道標はかなり整備されていたが(写真13)、まだ一部に分かりにくい所があり何回か迷った。この日は途中から、数日前同じ部屋に泊まったイタリア人の中年の男と宿泊地 Salceda まで話ながら一緒に歩き、同じ宿を取った。

8日(雨後曇)：昨夜泊まった Lavacolla から終点 SdeC までわずかに 11km なので雨と濃い霧の中をゆっくりと行く。この悪天で残念な事に Monte de Gozo の記念碑も見えず、ここからの SdeC の展望も全くなかった。昔の人はここから SdeC の聖堂の塔を見た時、本当に感激しただろう。これで歩くのが終わりかと思うと、無事に歩き終えてほっとした気分となにか寂しい気分が交錯する。歩いている途中話した人の中にさらに 80km 強先の大西洋に面した Fisterra (Finisterre) まで行くという人が何人かいた。私の事前勉強の不備でこの情報を見落していた。残念ながら私の日程ではさらに 2.5～3日



写真 14 サンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂と前の広場。

余分に歩けなかった。SdeC に入るころには雨が小雨となり、9時過ぎに聖堂に着く。広場には大勢の人がいる。抱き合って氣勢を上げて無事着いた喜びを爆発させている人も多い(写真14)。私はたとえば、特に特別な感情や感激が湧き上がったわけではなかった。淡々と、あー終わったな！というものであった。

巡礼の証明書を貰うのに時間がかかるので、到着後直ぐに行った(9時半頃)。並んで整理券を貰う。荷物を置きにホテルに行って戻ってきて証明書を貰ったのは1時半、4時間後である。巡礼手帳のスタンプ(図2)をチェックして証明書を貰う。これは無料である。他に歩いた距離証明(オフィシャルには779km)が€3、これを入れる筒が€2(写真15)。この日の晩は偶然一緒に到着した顔見知りの日本人4人と夕食を共にした。

因みに Saint-Jean-Pied-de-Port からここまでの Geographica による GPS 数値は、歩いた



図2 巡礼を終えた巡礼手帳。出発日(9月4日)と到着日(10月8日)が記入されている。ホテルのマークに注目。

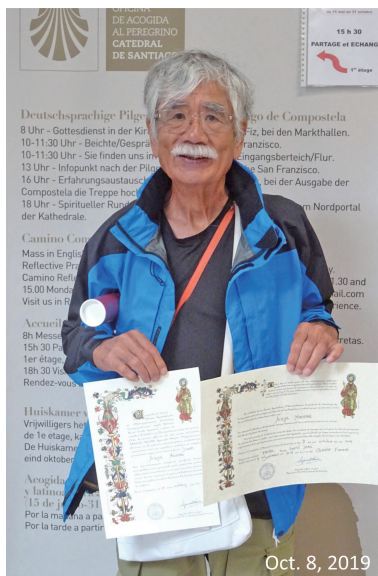


写真 15 巡礼を終えて、サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼事務所で安仁屋が手にする巡礼証明書（右手）と距離証明書（左手）。



写真 16 サンティアゴ博物館にある Santiago の木像。

距離が 764km、登った累積高度が 15428m、下った累積高度が 15392m、歩いた歩数は約 100 万歩である。これらの数字は歩数を除いて滞在中の街中を歩いたものは含んでいない。9 日はバスツアーで Fisterra へ行く。なんと楽なことか！途中、道を歩いている巡礼者を何人か見かけた。事前に知っていたら私も歩いたのに、と残念だった。Fisterra の先はアメリカ大陸である。車で来た人、歩いて来た人、それぞれが思い思いで大西洋を見ていた。私は歩いてここまで来て大西洋を見たらやはり感激するのではないかと、思った。四国の室戸岬や足摺岬で見た太平洋、この先はアメリカ大陸か！という感覚を思い出した。10 日は市内見物。聖堂・博物館をゆっくりと見学。サンティアゴの木像がある（写真 16）。

### おわりに

道中、足が痛くなったり、靴擦れができたり、風邪をひいたり、背中が痛くなったり、といろいろあったが幸い問題にならず、天気にも恵まれて計画通り歩けた。歩くスタイルだが、靴は踝までの底がしっかりしているもの、帽子は必携。ズボンは膝から下ファスナーでとれるものもいい。冬を除いて半ズボンは必需。上は吸湿速乾の T シャツ。靴下は足首までのスニーカーソックス（洗濯と乾きが早い）。毎日びしょ

り汗をかくので宿についてシャワーを浴びたらまず洗濯。T シャツ、下着のパンツ、靴下を洗う。洗濯バサミを 4 つ持っていくと干すのに便利。ザックに加えて、お遍路用の肩掛け鞆はものすごく便利だった。ガイドブック、スマホ、手帳、ペンの他に状況に応じてアメ、チョコレート、クッキー、果物などを入れた。ウィンドブレーカーは手軽に温度調節ができるのでとても役に立った。雨具はゴアテックスの上下を持っていったが、殆どの人はポンチョだった。風はあまり吹かなかったので、ポンチョの方がザックもカバーできるし蒸れなくていいようだ。傘をさしているのは見たことがなかった。90% 以上の人は 2 本の杖で歩いていたので、傘と杖は両立しない。私は普段使わないので持っていかなかったが、山道の長い下りは背中のためにあった方がよかったかもしれない。

宿で言葉を交わした人達のうちで最高齢は 83 才だった。この巡礼は 2 回目で、道中 86 才の人と会ったという。私の年を聞かれて（ほぼ）75 才だというと、彼の 1 回目が 75 才の時で家族と一緒にだったそうだ。今回は 1 人なので全ての宿を予約してから来たとのことで、荷物は配送サービスを使っていた。

因みに言語だが、巡礼宿を始めとして巡礼関連施設では予期に反してほとんど英語で済ん

だ。が、一歩外れるとやはりスペイン語。道中巡礼者同士の会話は英語。

帰って間もなくコロナの時代になった。いい時に行ったものだ。

## 上高地の三季

山田和人

山田ポール（京大山岳部 1979 年入部）です。会社を定年退職後、2020 年から日本山岳会上高地山岳研究所（通称サンケン、山研）の小屋管理人を務めています。それまで訪れる地、そして登山するために通過する地であった上高地ですが、春夏秋を実際に生活して感じたことを綴ってみます。冬の間上高地は閉鎖されるため四季でなく三季です。

日本山岳会会員の方はご存知かと思いますが、山研が建つ場所は河童橋を渡って 5 分程の所、梓川の右岸側です。河童橋付近はホテルが立ち並び開けた感じですが、右岸側を少し入ると河畔にケショウヤナギ、ハンノキ、サワグルミ、そして西穂・岳沢に向かう斜面はイチイやシラビソの暗い森が広がっています。この山小屋のある場所は明るくはないですが、河童橋の喧騒からは外れた静かな場所、京大ヒュッテを一回り大きくしたくらいの地下 1 階・2 階建ての瀟洒な小屋です。名称は「山岳研究所」となっていますが、研究者がいる訳ではなく日本山岳会の会員向け宿泊施設となっています。寝具は布団を提供しますが、食事に関しては自炊。但しご飯と味噌汁は要望に応じて提供しています。

上高地は 4/27 に開山祭、11/15 に閉山祭をお

こないますが、山研はそれに前後して小屋開け・小屋閉めをおこないます。小屋開け直後の GW は梓川沿いの平地にも固い残雪があり、樹々の芽吹きや早春の花々（Spring Ephemeral）もありません。新緑にはまだ早いです、ケショウヤナギの紅の枝先が目を楽しませてくれます。また晴れた日には梓川河畔から前穂高、吊尾根、奥穂、天狗岩などが白く輝き、黒い岩肌を少しずつ現わしていきます。5 月半ばを過ぎると渡り鳥たちが戻り、綺麗な囀りが聞こえ始めます。下旬になると花々が一斉に咲き始め、樹々も新緑と花の季節となります。6 月の声を聞く頃が、花々がいちばん賑わう時でしょうか。山研のバルコニー下はニリンソウの白で埋め尽くされます。昼間の気温も上がり、河畔のヤナギ類が次々と柳絮を飛ばし始めます。上高地が目覚ました！と感じられる時季です。

梅雨に入ると樹々の緑が落ち着き、暖かな雨と残雪の季節となります。晴れ間に見上げる山々の斜面には新緑が這い上がっていく様子が見られます。雨は穏やかな時ばかりでなく、激



写真 1 8 月下旬の山研



写真 2 11 月小屋閉め後



写真3 ストープ (11月)



写真4 GWの穂高

しい豪雨となって奥飛騨から上高地を襲うことがあります。2020年7月豪雨では約1週間道路が不通となり上高地は孤立しました。梓川の水位も上がり、河童橋の左岸にある公衆トイレ(河童トイレ)付近は溢水することもあります。梅雨が明けると穂高の稜線は黒々と輝き、谷間の雪がオイデオイデしてくれます。7月下旬から8月にかけての暑い時期も上高地では殆ど汗をかくことはありません。たまに松本へ食料の買出しに降りるとクタクタになります。身体が涼しい気候に慣れてしまい、自分は30度を超す日本の夏は過ごすことができないように思います。上高地では夏の花々が次々と咲きますが、西穂、岳沢、前穂に登っていくと見事なお花畑が広がります。お花畑も年による変化があるようで、昨夏はコバイケイソウが特に目立っていました。

8月下旬は青や紫のお花が目立ちます。9月に入っても気温の変化はあまり感じられないのですが、道端には少し控えめな秋の花々が次々と咲いて目を楽しませてくれます。9月下旬になるとシラカバ、ダケカンバの黄色い葉が時々道に落ちているのに気がきます。10月になると広葉樹の葉が日に日に色付いていきます。但し、上高地は針葉樹が優占する暗い森なので、紅葉が広がる景色にはなりません。梓川沿いの樹々の間から紅や黄色が覗いて目を楽しませてくれる程度です。目の覚めるような紅葉に出会いたいなら9月下旬に岳沢や涸沢まで登るこ

とになります。そして10月中旬になると気温も下がり冷たい雨の日の翌日は、穂高の稜線が冠雪します。この時に宿泊した人達は大喜びです。下旬になると朝の気温も氷点下の日が多くなり、上高地の平地もうっすら積雪します。山研には薪ストーブがあり、宿泊者がいる時は火を入れます。但し京大ヒュッテのストーブのように二次燃焼系のものではないため、薪の供給を頻繁にしなければなりません。そして11月の閉山祭の前には小屋閉めをおこないます。

山小屋には夫々強い個性があります。それは立地条件に大きく左右される部分と管理方針や利用者のニーズに沿った部分に拠っていると思います。僕は以前は改築後の京大ヒュッテ、現在は笹谷山荘(ベベヒュッテ)の管理に関わっていますが、山研ではその山小屋としての個性を大切にしていきたいと思っています。AACK会員の皆様も機会があれば山研を訪れて京大ヒュッテとは違う山小屋を味わってみては如何でしょうか。山研の宿泊は誰でもOKという訳ではなく、日本山岳会会員とその同行者に限られますので、誘い合わせてみてください。日本山岳会には団体会員という制度があり、団体会員になるとその団体の構成員は、山岳会会員と同様に山研を利用することができます。AACKは現在日本山岳会の団体会員になっていませんので、この制度は利用することができません。理事会で検討してみても如何でしょうか。尚、KUAC(京大山岳部)は団体会員です。

## 編集人注：

山田和人会員は、日中友好ナムナニ峰合同登山隊の先遣隊(1984)および本隊(1985)に参加。日本山岳会では理事(2013-17)ならびに副会

長(2015-17)をはじめ、いくつもの役職に就かれました。2020年から山研管理人を務めておいでなので、山研の紹介を含め寄稿をお願いしました。

# 雲南懇話会、京都開催までの歩み

## —コロナ禍に翻弄された日々—

雲南懇話会幹事団

コロナ禍の影響で過去2回の延期を余儀なくされた京都での懇話会(京都フォーラム)は、2021年12月18日に無事開催することができました。講演の概要は次号のニュースレターで紹介させていただくことにして、今回は京都フォーラム立案までの経緯、コロナ禍による延期、京都フォーラム当日の様子などを速報的にお伝えいたします。

それは2018年のことだった。雲南懇話会が創立(2004年12月)から15年経ち、開催した講演会が通算50回を迎えようとする節目に、何か記念となる企画をしたいとの機運が雲南懇話会の幹事団に芽生えていた。折しも、5月のAACK総会で雲南懇話会の活動報告をした山岸に、斎藤清明会員から「いつも懇話会を東京でやっているが、関西ではやらないのか?」との質問があった。山岸はこの問いを東京に持帰り、幹事団に伝えた。

雲南懇話会の活動は、主に参加者が支払う会費と幹事団の献身的尽力により支えられており、毎回90~110名前後の参加があった。懇話会を京都で開催する場合、どれだけ参加者を集められるのかが心配であった。しかし、懇話会代表者の安仁屋から「京都開催なら、関東在住の常連が観光旅行を兼ね、かなりの数、参加してくれるのではないかと。やってみよう」との発言があり、京都で懇話会を開催する計画(京都フォーラム)は前向きに検討されることになった。

12月に開催された第47回雲南懇話会後の二次会は、京都フォーラムの話題で盛り上がった。「京都開催なら、会場は是非、京大時計台ホールで!」、「幹事団の宿舎として地球研のゲストハウスの可能性は?」などの具体的な意見も出

て、幹事団の中で京都フォーラム開催の意志が固まっていった。

2019年は京都フォーラム実現に向け、具体的に活動する年になった。まず、新年早々の幹事会で基本事項(開催時期、会場、施設使用申請者、支援金の見通し、講演者、演題等)が確認され、AACK関東会の新年会、AACK理事会(3月)、総会(5月)で京都フォーラムの開催を正式に表明し、多数の会員の参加をお願いした。6月の幹事会で進捗状況が確認された。8月には雲南懇話会発足15周年を祝う昼食会に関東在住のAACKシニア会員をお招きし、15年間の活動を報告するとともに、京都フォーラム開催についてご案内した。

京都フォーラムに多くの参加者を招くには、魅力ある講演が必須となる。幹事会で講演テーマの検討が行われ、ヒマラヤ、雲南、チベットの山や文化などのテーマの他、「京都ならではの」テーマとして、京都を代表する文化人・知識人と、千日回峰行者(大阿闍梨)のお話が提案され、前田、安仁屋らにより講師の人選と交渉が進められた。

2020年は京都フォーラムを実行する年になるはずであった。1月早々、参加者募集をスタートさせるなど総ての準備が整い、1月20日、松浦会員宅で、幹事団による細部の打合せが行われた。あとは粛々と開催準備を進める手筈であったが、2月下旬より新型コロナウイルスの感染が徐々に拡大し(第1波)、3月下旬に至り感染予防のため、日本各地で集会中止の報道が相継ぐようになった。5月下旬に開催予定のAACK総会も、理事会でのメール審議により、書面での会合に変更された。このような情勢の

下、5月上旬に開催予定の京都フォーラムも何らかの対応が迫られた。幹事団でのメール協議を経て、遂に4月2日、「開催を翌年まで延期する」との苦渋の決断が下され、申請中であった「京都大学百周年時計台記念館使用申請書」を取り下げることにし、関係者、参加予定者への連絡も行われた。その後も感染の勢いは止まらず、4月7日に7都府県に1ヶ月の緊急事態が初めて宣言され、4月16日には、緊急事態宣言が全国に拡大された。

その後、8月にも新たな感染のピーク（第2波）が起きたが、9月以降は静まったため、12月に計画されていた第52回雲南懇話会は、感染防止対策をとり、対面方式で開催することができた。この成功体験を踏まえ、延期された京都フォーラムを2021年5月に開催することにし、諸準備が進められた。

2021年は落胆の後、喜びを迎えた年であった。1月から感染の第3波が立ちあがり、前途多難を思わせたが、3月には鎮静化し、このまま静かに推移することを願った。雲南懇話会では人が対面で会うことが重要と考え、講演会のリモート開催には否定的であったが、世の中の趨勢から、リモート開催の備えも必要であると認識し、3月中旬には幹事2名を京大時計台ホールに派遣し、通信環境の下見とZoomによる通信テストを行った。4月に入ると、恐れていた感染の拡大（第4波）が起こり、東京では4月12日に蔓延防止措置が発令された。京大に勤務するAACK会員からは、感染防止のため学内で採られている厳しい規制の現状が伝えられ、対面重視の京都フォーラムの実施を懸念する声が聞かれた。これを受け、幹事団によるメール協議が進められ、4月25日から緊急事態宣言が発令されるのを機に、5月の京都フォーラムは再度、中止することを決定した。直ちに関係者へ中止の連絡が行われた。

中止の決定は即ち、再設定の始まりとなった。諸般の事情から、今回は年内開催とすべく、京大時計台記念館の複数の日程を押さえた上で、主要な講師のご都合を伺い、開催日を2021年12月18日（土）と確定した。因みに「特別講演」と銘打った山極壽一前京都大学総長は安仁屋が、光永圓道大阿闍梨は前田がそれぞれ打診した。京都フォーラムのプログラムは、2021年

5月に開催予定だったフォーラムと全く同じ講演者をお願いすることになった（以下の通り）。

1. 「雲南懇話会の概況と1989年当時の梅里雪山山麓（ス農村、明永村）」  
（雲南懇話会代表、筑波大学名誉教授 安仁屋 政武）
2. 【特別講演】「千日回峰行を生きる」  
（比叡山延暦寺一山大乗院住職、北嶺大行満大阿闍梨 光永 圓道師）
3. 「パミール・天山7000mの峰々からヒマラヤの高峰へ」  
（登山家、高峰ガイド、Snow Leopard Award 受賞者、8000m峰9座登頂者 近藤 和美）
4. 「茶を育てて見えてくること —雲南省（徳宏州）南見村と島根県柿木村から—」  
（雲南懇話会幹事、Tea literacy 上原 美奈子）
5. 【特別講演】「ゴリラに学ぶ —ヒトの未来、地球の未来—」

（総合地球環境学研究所長、前京都大学総長 山極 壽一）

#### 【スライドショー】

1. 「西ネパールの辺境に魅せられて —河口慧海師の足跡、フムラ・ドルポ越冬—」  
（ネパール探求家、美容師、2020年植村直己 冒険賞受賞者 稲葉 香）
2. 「中国雲南省明永村、徳欽県の今」  
（岐阜大学応用生物科学部助教 田中 貴）

7月より、5月に中止となった京都フォーラムに申し込んだ人を優先して、段階的に（当初70名⇒80名⇒最終的には120名）参加者の募集が始まった。8月には新型コロナウイルス・デルタ株による巨大な第5波が立ちあがり、12月の京都フォーラムはどうなることかと心配したが、幸いワクチン接種が行き渡った効果もあり、9月に入ると感染は鎮静化し、10～11月には安心して開催準備を進めることができた。開催準備も3回目となると様子がわかり、スムーズに進行した。

今回のフォーラムは感染が拡大した場合、対面開催にはこだわらず、リモート開催に切り替える方針にした。そのためには、確実にリモート開催を実施できる体制を作り上げる必要があった。当初、京大生協のコンベンションサービスの利用を考え、協議を始めたが、このサー

ビスは高額であった。一方、AACKにはリモート会合に習熟した京大教員もいることから、竹田会員に支援をお願いし、リモート開催が必要な場合は竹田会員が所属する研究グループのリモート会議システムを利用させていただくことにした（幸い、コロナの感染拡大は起こらず、その必要性は生じなかった）。

12月に入ってもコロナの感染は静まったままで、2年越しの京都フォーラムを遂に対面開催することが可能になった。17日の夕方、京大時計台に雲南懇話会の幹事団10名が集まった。まず竹田研究室から、あらかじめ送った講演資料を受け取り、またコロナ対策用の機材（非接触体温計、炭酸ガス濃度計など）を借用し、会場準備が始まった。100人余りの聴衆用の長机70台、椅子110脚等を配置する作業や、マイク、プロジェクターのテストを行った。肝心のプロジェクターが正常に映写できず焦ったが、リモコンの故障と判明し、代替え機を見つけて事なきを得た。

フォーラム当日の18日朝は、前夜来の雪が舞っていた。東京方面からの参加者は新幹線の米原付近の徐行により遅れるらしい。会場には関東から来られた常連の方々、いつもの懇話会ではお目にかからない関西の方々の姿を見ることができた。AACK 関東会の年長の方々も何人か見えていた。川喜田二郎氏の西北ネパール調査隊（1958年）に参加し、60年以上前のドルポを訪れた並河会員と、最近のドルポ地方を踏査し、その様子を今回スライドショーで紹介される稲葉香さんは、この日初めての対面となり、ドルポの今昔を語り合う姿が印象的であった。

各講演の概要は次回のニュースレターで紹介させていただくが、どの講演も、その道の第一

人者による素晴らしいお話で、聴きごたえのあるものであった。参加者からの質疑応答も活発であった。光永圓道師には講演後、参加者と一緒に集合写真に入らせていただき、参加者にとってよい記念となった。

時計台ホールは換気能力が高くなく、コロナ感染防止のため頻繁に窓を開け、換気することを勧められたが、当日は気温が低く、必要以上の窓開けは避けたかった。そこで役に立ったのが竹田研究室から借用した炭酸ガス濃度計である。炭酸ガス濃度1000ppmを換気が必要な目安とし、過不足のない窓開け換気を行うことができた。

第2部スライドショーが始まる前に小一時間程の休憩時間が設けてあり、講演会場隣の控室で仕出し弁当の配布と飲み物の提供が行われた。感染予防のため、三密を避けた静かな会食であったが、日頃会えない旧知の方々が三々五々、飲食を共にされる姿に、対面で実施できてよかったな、としみじみ思った。

このようにして、2回の中止（延期）を経て開催された京都フォーラムは無事終了した。参加された皆様は満足されたようで、幹事団としては何よりの喜びであった。講演会場の長机、椅子の原状復帰作業はなかなかの重労働であった。廃棄物は会場に残置出来ないため、竹田会員に処分をお願いした。すべての片付けが終了した後、幹事団は北白川の居酒屋に集い、静かに杯を挙げることができた。心地よい疲労感と達成感に満たされ、幸せであった。京都フォーラム開催までの長い道のりに、変わらぬご理解とご支援を賜ったAACK 諸兄に感謝申し上げます。（文責 山岸久雄）

## 事務局だより

AACKは新たに学生会員枠を設けていますが、その経緯はNewsLetter No.53 8-9に詳しく記されています。ここでは、改めてその概略を紹介します。AACK会員の多くは京大山岳部（KUAC）出身者ですが、実際のところ、いつの頃からか10数年前までKUACとAACKの関係は希薄になっていました。なんとかKUACとAACKの間の交流を深めることは出

来ないかと2010年当時の山岳部長、AACK会長をはじめ関係者の間で知恵を絞った結果生まれたのが、学生会員枠です。現役の山岳部員がAACK会員になればよいということです。名称は学士山岳会となっていますが、定款上、会員は学士である必要はありません。学部生、大学院生に限り、入会規定を入会金500円、年会費500円に設定すれば、山岳部員も大学院生

になった山岳部OBも大きな負担なく AACK 会員になることができます。会費を割り引くだけです。定款の改定も必要ありません。このように学生会員枠を設けることが 2010 年の AACK 総会で決定され、実際に今まで、山岳部員 42 名が学生会員枠で AACK 会員となりました。うち、4 名は通常の会員に変更しており、現在、学生会員枠の会員は 24 名になります。2010 年以降、毎年山岳部員も AACK 総会に参加するようになり、総会終了後の KUAC 山行報告会や合同懇親会も恒例となりました。一方、AACK からは海外登山・探検助成制度を通じ

て、KUAC ネパール・ヒマラヤ登山隊 (2010) や KUAC ザンスカール隊 (2012) に対する援助を実施しています。今、KUAC と AACK の交流は活発になっています。

続いて、会費振り込みの際の留意事項です。2022 年 1 月 17 日付のゆうちょ銀行各種料金の値上げに伴い、一部の方には郵便振替による会費振り込みの際に 110 円の手数料が発生する見込みです。ゆうちょ銀行ホームページを確認されるか、直接郵便局窓口でお問い合わせをお願いします。

## 会員動向

### 訃報

宝田克男 2021 年 11 月 25 日逝去

舟橋明賢 2021 年 12 月 29 日逝去

吉野熙道 2022 年 2 月 10 日逝去

## 編集後記

Newsletter 第 1 号が 1996 年 5 月に発行されてから 25 年、先輩編集人の方々と会員の皆様のおかげで、ついに節目の 100 号となりました。67 号から編集人を務めておりますが、節目らしいこともできず申し訳ありません。この間の変化としては、70 号から横書きに変更したことと、82 号からウェブサイト (AACK ホームページ) 掲載版の写真や図がカラーになったことがあります。後者は編集発行でながくお世話になっている土倉事務所・伊藤貴子さんの提案でした。

編集人としてはあまり特別な企画をせずに、皆様からの投稿に頼って発行を続けてきましたが、100 号もおかげさまで興味深い内容でお届けできます。

スペインの巡礼路はテレビで紹介されたこともあると思いますが、安仁屋さんの文と写真ではさらに身近に感じられ、興味がわきます。

山田さんによる上高地の「三季」の紹介を読むと、山田さんのおられるうちに山研に行ってみたくになります。

雲南懇話会・京都フォーラムの対面での無事

開催、おめでとうございました。実現には幹事団を中心に、記されたよりさらに大きなご苦労があったことでしょう。

著者の皆様ありがとうございました。新型コロナ禍の少しでも早い収束を願いつつ。

横山宏太郎

発行日	2022 年 2 月 28 日
発行者	京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所	〒606-8501 京都市左京区吉田本町(総合研究 2 号館 4 階) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 竹田晋也 気付
編集人	横山宏太郎
製作	京都市北区小山西花池町 1-8 株土倉事務所